

日本現代文壇

全集

31

小杉天外・木下尚江・上司小劍集

日本現代文學全集 31

小杉天外
木下尚江集
上司小劍

講談社

日本現代文學全集

31

小杉天外・木下尚江・上司小劍集

編集

伊藤 整
龜井勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷

昭和43年3月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著者 小杉天外
木下尚江
上司小劍

装幀 蟹江征治

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

印刷 慶昌堂印刷株式會社
製本 和田製本工業株式會社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便番號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振替東京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106312-2253 (1)

(文1)

小杉天外集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

はやり唄……………七

伊豆の頼朝……………九

作品解説……………稻垣達郎 二五

小杉天外入門……………瀬沼茂樹 三二

年 譜……………三九

参考文献……………四四

木下尚江集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

火の柱……………一七

洗 禮……………二六

革命の序幕……………二六

作品解説……………稻垣達郎 四二五

木下尚江入門……………瀬沼茂樹 四二三

年 譜……………四二四

参考文献……………四四五

上 司 小 劍 集 目 次

卷頭寫眞
筆 蹟

作品解説……………稻垣達郎 四一五
上司小劍入門……………瀬沼茂樹 四二六
年 譜…………… 四三九
參考文獻…………… 四四六

灰 燼…………… 四七九
鱧の皮…………… 四三三
太政官…………… 四三三
U新聞年代記…………… 四六六

小杉天外集

あつた
とろろが吹水
とろろ和
とろろ

はやり歌

敘

自然は自然である、善でも無い、惡でも無い、美でも無い、醜でも無い、たゞ或時代の、或國の、或人が自然の一角を捉へて、勝手に善惡美醜の名を付けるのだ。

小説また想像の自然である、善惡美醜の孰に對しても、敘す可し、或は敘す可からずと羈絆せらるゝ理屈は無い、たゞ讀者をして、讀者の官能が自然界の現象に感觸するが如く、作中の現象を明瞭に空想し得せしむればそれで澤山なのだ。

讀者の感動する与否とは詩人の關する所で無い、詩人は、唯その空想したる物を在のまゝに寫す可きのみである、畫家、肖像を描くに方り、君の鼻高きに過ぐと云つて顔に鉤を掛けたり何が出來ようぞ。

詩人また其の空想を描寫するに臨んでは、其の間に一毫の私をも加へてはならぬのだ。

辛丑極月

天 外

第 一

四五日降續いた卯の花朽も曉方から收つて、この村を肥す夏は今日の南風に乘つて來たかと思はるゝ卒の暮さである。

土からは土の香氣、草木からは草木の香氣が、此のいい日光に蒸

されてぼやくと立騰つてゐるが、其の立騰つた香氣の凝つたのか、晴渡つた空を煙の様な淡い雲が途切々々に飛んで行く、と、其の雲の上では、雲雀のお饒舌が引切無しに聞えてゐる。地の上は地の上で、何處でも家を空にして働きたか、田にも畑にも一面に人影が散ばつて、日光を反射する農具の鐵がびか／＼と動き、温んだ水の中では蛙が唄つて居る。村の地勢は北に進むに連れて次第高になつて、上の方は悉く畑で、折しも鎌を入れる許に實つた麥は、暖かな風に黄色い浪を打つてゐるが、其の浪の消える際涯に……丘を登詰めた所に、大きな寺の山門が見える。

眞言宗で修行院と云ふ寺だ。宇都宮公綱の墓が在るので、縣内に名の聞えたものだが、久しい前に下男の過失からさしいの大伽藍を全焼にした後は、廣き境内に假御堂淋しく、本堂再建の札も雨風に墨色失せて、松、樅などの大木、晝も小闇きまでに繁茂つた下に、鐘樓と山門ばかりは昔時のまゝに遺つてゐるのだ。

「私等が口で此様ねえな事云つてはア、今の旦那様にも奥様にも濟まねえけど、何んでもこれ、代々然うした血統だんべえ云ふ話だよ。」

「ちや、淫亂な血統つてんだね、や、其奴ア厄介な血統だ。」

「其が證據にはお前様、今日の佛様だの、先の奥様だの許で無えだからね。」

「へい、其の、男狂ひ爲た奴がね、へい？」

「あゝ、男狂も男狂ひ、始末に能ねえ婆様が在つたよ。」

「婆様つて云ふと？」

「先の奥様の阿母だがね……。私等、未だ根から小兒の時分だで、能くは覺えて無えけど、何でも色の白え、でつぷら肥つた、えら、立派な婆様だツけえよ……。」

「ちや、其の婆様も、矢張り男狂ひを遣らかして、身でも投げて死んだ奴だね？ 成程、此奴ア血統かも知れねえ。」

「なアにさ、婆様は其様ねえ事でおツ死んだで無えだがね、如何だ

ツバえ、六十から以上になつて、男妾の三人も置いたよアよ。」

「三人？　へい！　六十にも成つて？　大變な奴が有つたもんだなア、何の事ア無い、宛然女の狒々だ、あはムムム。」

三時頃の日脚を一杯に浴びてゐる山門の石階の下で、紺の半被を着た車夫と、ちよいと鬚の百姓とが此様な談話をして居る。車夫は言葉付から尻こけに八端の細帯を氣取つて締めて居る處から、一見して東京の者と判るが、斯る田舎には勿躰ない程奇麗な腕車の蹴込に腰を卸して居る。百姓は此へ横向きに石階に腰掛けて、雁首の大きな奴で臭い蕨をばぐりく遣りながら、其からそれと限もなく饒舌つて、時の經つのも平氣で居るのは、只だ談話好きの故のみで無く、今日桑伐に出たのも眞の若者への手助けに出た隠居の身だからであらう。

「だが爺さん、能く其れで、三人の妾同志が治まつたもんだな、矢張り、意氣地無奴が廻部屋に打込まれた様に、溫和く婆様のお廻りを待つて居がツたんだね、はムムムムムムム。」

「ところが治まらねえだ。」

「妾同志が……？　成程、此ア治まるめい。女の妾だつて三人も有つた日には何だ、能く芝居でも演る奴だが、御家騒動の發端なんだ……、況して野郎の妾と來ちやアな、うん、此ア治まるめいよ。」

「治まらねえのなんのツて、初中終紛擾返して、出るの出さ無えのツて、物言許爲ちよりますだ。それも可えけど、其の度に費る物はそら、此だツバえ！」と百姓は太い指を丸くして見せる。

「うん、金が、然うだらうツて、妾の機嫌を取らうて日には、是非其奴を握らせなきや成らねいんだからな。だが、三人で以て強請つた日にア、大した費だツたらうなア？」

「費つたの費ら無えのツて、『七兵衛河さ行きや鵜が水浴びる、圓城寺婆様金浴びる』て、歌にまで唄つたよからね。」

「へう。」

「其の婆様の代までは、高根澤の圓城寺で云やお前、江戸まで響い

た長者だツた。」

「ぢや、其の、婆様の淫亂で可け無く成つたやつたんだ？」

「なアに、可け無くなツた云つても、圓城寺様は圓城寺様だアね。未だ、芳賀鹽谷二郡で、二番と下らねえ地主様だからね。」

「でも、其の前までは未だ良かつたんだ、其の、今の多淫婆様の前までは？」

「其れアお前様の前だけんど、江戸はお膝下だ云つても、彼様ねえな大仕掛の生活無かつたべえ、何だツてお前、お上から炊婦までつツ括めたら、五十人から居たよア、それに、馬だら二十疋、大猫だツて十疋二十疋は蓄つて置くだア……。」と乘氣に成つて自慢話をすると、

「はムムム。其のまた大猫が、淫亂の血統を引いて矢鱈と子を放りやがるか？　此奴は大變だ。あはムムム。」

「全くだよ、あはムムム。」

二人が大聲で笑ふと、直ぐ頭の上で、

「えせムムム。」と締なく笑ふ者がある。

「えッ、勘公か、誰かと思つた。」と車夫は吃驚する。

「己も吃驚したよア。」と百姓は肩で溜息をして、「やい、勘公、汝、其れでも人の談話とこ解るか？」

「手前なんか何だ、土百姓の齒抜爺。」

「彼様な事を云つて居がら、手前は何に成つた氣だらう？」

「何でも、御役人様か御大名に成つてるだアね。」と爺は笑ひながら、「やい、勘公、汝其を何處から探つて來たよ？」

「己が畑から探つて來たよ。」

「己が畑か？　はムムム、己が畑は可いちや無いか、はムムム。」と車夫は笑ふ。

「勘公の氣ではア、村中の地所皆な我が有だムからね。一番に可いだよ。はムムム。」

二人が笑ふと、また、

「えせムムム。」と聲を合はして笑つた。

雀の巢が下がつてる山門の柱に凭かゝつてた勘公は、三千許の日に焼けた黒い顔で、赤い髪を蓬々と長く生し、袖の横断れかゝつた垢だらけの着物で、誰の惡戯か細い帶の端を繩に縫つて長く垂れ、而して何處から抜いて來たのか、土の着いてるまゝの麥を片脇に抱へて居る。

「だが爺さん、今は此様なだが、勘公はこれで、今日の佛様と奇な間だツたてぢやねえか？」

「なアに、今日の佛様で無えだよ、今日の佛様色狂ひおツ始めた時はア、勘公最う此様ねえ成つてたよから……。」

「然うか、ぢや先の奥様だね、其の……姦夫の種を宿して投身したツて云ふ？」

「然うだとも、其の奥様だとも……。」

「へい。」と車夫は勘公を見上げて、「色は思案の外つて事は有るが、此様な奴の何處が好いだらう？ 奥様も餘程な茶人だツたな、あはムムム。」

「茶人云や茶人に違え無えだね、何様ねえ男でも、變つた男食つて見度え云ふだアから、はムムム。」

「だが、是で前の奥様のお情受けたんだから可笑いや……。やい、色男の勘公、はムム、彼様な顔を爲やがら……。勘公、汝、奥様に口説かれた時は何様なだツたい？」

「氣い此様なで無えだと、其れ談爲せたら可笑がツべえね。」と爺も勘公を見上げて云つたが、「勘公、ほら、蜂刺すだ、ほら打拂はねえかよ、汝、其の面蜂に刺されて何うするだ、ほら。」

「はムム、色男奴、蜂に追蒐けられて逃出しアがツた、あはムムは。」

「何と云ふ態だツべえ。おーや、跋曳いてるだア。また、誰か惡戯したダアね、可哀想に……。」

此う云つてる中に、勘公の姿は桑畑の陰に見えなくなつた。

「考えて見りや、世の中は色情さね。」

「まアづ其様な物だツべえ、あはムム、」と爺は大口を開いて笑つて、「何様ねえ儂ア人でも、此の道許辛抱出來ねえだから。」

「血統つてのも變だが、其様な、六十にもなツて、男妾の三人も置いた婆様が有つて、彼様な、勘公見た様な奴にまで手を出す奥様が有つて……。」

「それに今日の佛様だ、淫亂に淫亂遣つた擧句、庭の池さつ、陥つておツ死ぬだから……。」

「成程、此奴ア血統かも知れねえ、」と車夫は首を掉つて、「だが、爺様、今日の佛は何様なだツたね？」

「面かね？」

「今の奥様の姉なら、醜い筈は無えなア。」

「醜く無えのなんのツて、彼様ねえ美しい女、繪にも描けねえだよ。だもんだで、稀に宇都宮さ出るだと、町中魂消打つてはア、眼球剥出して見ちよるだア。」

「ふーん。」

「お前なんぞ見せたばら、腰打抜かしてはア、腕車掘く事も出來ながツべい、あはムムム。」

「はムム、ぢや、ま見ねえて幸福だツた、はムムム。」と車夫も笑つたが、「其様な女に生れて……、惜いもんだなア爺様。」

「球に啖云ふなア彼の事だアね。何でもはア、美い男見ると、諸味食つた泥鰌の様に成つたよからね……。」

「その、男狂ひ初めたな幾歳から初めたんだね？」

「さアればね、何でも十六七の頃だツべいよ、未だ根つから小兒の時に、學校の先生とお前、東京さ駈落遣らかしたダアから。」

「早く、婿でも取つて遣りや好かつたらうにな。」

「婿も取つて遣つたアね、だけれど、幾ら取つてもはア、珍らしい中許で、直ぐ他の男拵へるだアから、誰だツて辛抱して居ねえだ。」

「其様な鹽梅ぢや、關係つた男の數許も随分少なからうね？」

「其はお前、何十人有るだか知れ無えだ。今の奥様から三歳上まで、何でもおッ死んだ時は廿二だツけえ、十六から男狂ひ打初めて、十六、十七、十八……………」

と、爺が指を折り始めた時しも、突如に山門内から人の聲が聞えて、鉛色の西洋犬が二人の顔を駈抜けたので、吃驚して背後を見返ると、

「畜生々々」と叫びながら、水兵の服を着た餘り肥つてない男の兒が、靴音荒く石階を駈下りて、逃廻る犬を追蒐けて來た。

犬は桃色絹の大きな手巾を咬へて居るが、男の兒に追はるゝを、嬉想に其邊を一廻りして、また山門の中についで駈込んで行つた。

「畜生々々」と少年も續いて門内に行つて了つた。

二人は呆氣に奪られて其の跡を見送つて居たが、驢爺は腰を伸して、

「やれ、えい、事お饒舌爲たツけい。どーれ、仕事に掛るべえ。」と、煙草入を腰に提げ、其處に置いた桑切鋏を取上げて、「血統血統云ふけれど、其様ね惡え血統はア、今日の佛様で斷れだツべえよ。奥様は彼様ねえ學問爲たよし、旦那様たア間は好えだし、それに、末の嬢様だツて、獨身で堅くして居なさるだし……………」

「全くだ、爺様の云ふ通りだ。今後は反對に、婦人の鑑になる様な、大した血統に變つ了ふんだ。」

「然うだツべい。どーれ、其だら己も怠慢無えで、良え血統でも遺すべえか。」

爺は桑畑の方へ下りて行つた。車夫は大きく伸をして、

「あーあ、最う何時だらう、大分待たせるなア。」と一人語して、腕車に被つた塵をばた／＼と手で拂くと、畑から飛んで來た砂埃が蒲團の上に浮くのである。

ところへ、石疊を蹈む下駄の音騒しく、が／＼と話聲近くなツて、杖を支いた老人を眞先にして、孰れ令嬢か奥様と云ふ風の束髪が二人、丸髻が一人、少し後で股引に半合羽の下男が一人、日の煥

煥と射す山門を出て來たが、出て来るや否や、言合はした様に三人の婦人は、黒と緋と海老色緞子との三色の洋傘をば／＼と開いた。

「こかあがみやアと、うらのけえいッばえいだ。」と石段を降り様とした老人は立止つて、廻らぬ舌で此う云つて莞爾笑つた。

「え、何ですツて？」と老人の手を曳いて居る丸髻は訊ねた。

「うらのけえけよ。」と老人は同じことを繰返すと、

「は、村の景色ですか。」と丸髻は點頭いて、「然うですねえ、此處から見下ろすと、何時見ても好い景色ですねえ。」

「いゝもうせんれのけいさだ。」

「え、芋……、芋が何うしたんですツて？」と丸髻が解しかねて可笑いと云ふ様な顔をする。

「いもでれい、いゝもうせんれ。」と廻らぬ舌で焦躁つた想に云ふ。

「いゝもう……？」と丸髻は二人の束髪を顧みて、「いゝもうツて、何でせう？」

「こかあがめいと、いゝもうせんれ。」と老人は又云つた。

「爰から眺めると、いゝもう……、」と年長の束髪が考へながら云つた。

「あゝ、一望ですか。」と年下の束髪は老人の顔を覗いて、「一望千里……、然うでせう、ねえ阿爺さん。」

而ると阿爺様は莞爾して、

「然うら。」

「然うですと。おほ／＼、姉様は芋だなんて、ほ／＼／＼。」

と年下のゝが笑ふと、他の二人も聲を合はせて笑つた、而して老人を扶けて一同徐に石段を降りた。

老人は五十幾歳と云ふ年輩である。背の高いでツぶり肥つた大男で、額は深く禿げ、下唇は少し歪み、右の肩は筋の斷れた様に下つてゐるが、何處か品の有る立派な顔で、茶微塵の一樂の袷に黒羽二重の五ツ紋の羽織を着てゐる。三人の女は孰も紋織御召の袷に縹珍の帶で、顔から扮装から此邊に珍らしい美人であるが、中にも際立つ

て見えるのは丸髷で、容貌も一番に優れて居るが一番に金の費つた服装をして居る。

廿二三の年頃、艶のある白い活々とした顔で、何處か明放しの、更に餘念の無い様な冴えた黒目勝の眼、何時も笑つてる様な可愛い口で、細面ながら頬の邊むツちりと肉付いて居る。

「お危なうございます。」と車夫は駈けて来て老人を抱下さうとした。

「だ、大丈夫。」と老人は急に他の手を振離して獨で、さうと下りたが、危ふく轉び相になつた。

「あら、阿爺様！」

一同石段を躍下りて老人を抱止めた。

「おー危なかつた。」と丸髷は、息を吐いた。

「轉んだら如何だつたらう、まア！」と若い束髪は他の顔を見廻した。

「ですから阿爺様、其様な無理を爲さるぢやありませんよ。」と年長の束髪が云つた。

「だちよだ。はムムム。」老人は力なく笑つた。

「大丈夫な事はありませんよ。石段で轉んだら大變ぢやありませんか。」矢張り年長の束髪が云つた。

「だちよだ、未だ、此通えだ。」と利かない足を無理に地踏して、
「はムムム。」

「ま、其様な事はお止しなさいよ。」と丸髷は老人を抑へて、「おほほムム。」

「本當に阿爺様は可けないよ、無理許り爲さるんだもの、貴方は病人ぢやありませんかね。」と年長の束髪は、其の蒼白い顔を少し勃然とさせて云つた。

「何日迄病氣えもんか、も大丈夫だ。」

「だつて、藥飲んでるぢやありませんか……、あら、腕車へ乗らないの？」

「餘え、好景氣だかア、少え散歩すう。」

「其様な事を云は無いで、お乗なさいよ。」

「大丈夫だ、はムム。」

「ま、薫さん、可いぢやありませんか、云ふ通りに爲してお置きなさいよ。」と丸髷は、老人を腕車に乗せ様として居る束髪の袖を曳いて、「阿爺様、ぢや、私手を曳いて進げませう。」

「お前可けえ。」と老人は丸髷の手を退けて云つた。

「おや、私ぢや可けないの？」

「たけほ。たけほ。」

「竹代様？ 竹代様なら可いんですか、然う？ 竹代様、と丸髷は若い束髪を振向いて、「貴女でなきや可けませんと。私、阿爺様に嫌はれてよ、ほムムム。」

「ほムムム。」と笑ひながら竹代は老人の手を取り、徐に歩を移したが、「おほムム、阿爺様彼様な事を、ほムムム。」

「何うしたつて？」と薫が後から訊ねた。

「ほムムム。」と竹代は猶も笑ひながら、「彼のね、良人の有る人の手はね、可けませんと、おほムムム。」

「おほムムム。」と薫は丸髷と顔を見合はせて笑つたが、「本當に、阿爺様は厭な事を仰有るよ。」

「ぢや、今後は最う、何様な事が有つても、手を曳いて進げないから、ねえ薫さん。」

「あゝ、誰が、と笑ひながら云つたが、背後に立つてる半合羽の下男を顧みて、「儀助、お前其の、箱を腕車に載せてね、阿爺様の傍に附いてつてお呉な。」

「はい。」下男は命ぜられたまゝ、線香や何やを入れて来た定紋の風呂敷を被けた箱を車に載せて、老人の背後にのツそり附いて行く。

「おや、君様は何してゐるんだらう？」と丸髷は立止つて山門の方を振返つた。

薫も車夫と同じく山門を見上げた。直ぐ先刻の水兵服の少年が丁度犬と共に出て来た。

「秀様、速くお來でよ、何してるの？」と薫が聲を掛けた。

「こら、方丈様から此様なに貰つた！」と少年は手巾に包んだ物を振上げて見せたが、其機にばら／＼と枇杷の實が零れて、石段の上をころ／＼と轉げ落ちる。

「やア、平吉、拾つてお呉れよ。」と少年は叫んだ。

車夫は石段の下に駆けて行つたが、

「坊様、まア洋犬をお離しなさい、そら／＼、また落ちます、それ、それ。」

「秀様、手巾に穴が明いてゝよ。」と此方から丸髷が聲を掛けた。「本當？」と包を上げて、「やア、此様な穴が明いてら。」

そこで、丸髷も石段の下へ行つて枇杷を拾つて遣る。少年はまた其を他の手巾に包んで貰ふ。

「おや、阿爺様は腕車へ乗らないの？」と少年は二三十間前に行つた老人等を眺めて、

「ぢやア僕が乗らう。」

「お止しよ秀様、お前様は歩けるぢやないかね。」薫が止めると、

「だつて、僕ア疲れたつたもの……、雪江様、乗つても可いね？」と丸髷の顔を覗いて、「そら、可いんだとよ、雪江様家の腕車だもの、雪江様が可いッたら可いぢやないか。」

「それでも、平吉も疲れてるぢやないかね。」

「なに疲れてるもんか、ねえ平吉、乗つても可いね。」

「お召しなさいまし。」

「そら見ろ、えー！」少年は叫んだ、而して洋犬と共に腕車に躍乗つた。

「まア、洋犬と合乗なの？」と薫が呆れると、

「合乗ぢやないよ、手荷物だよ。」

「秀様、それ、手荷物が顔を嘗めますよ、ほ／＼。」と雪江が笑

つた。

「おほ／＼、お前達は本當に仲が好いよ。」と薫も笑つた。

車夫は楫を上げた。兩端を柔かな青草に縁取られた田舎道を、車は音も無く廻つて行く。暖かな風の吹渡る毎に、左右の畑は緩く浪を打つた。着物の裾は飄へる、紅い襦袢がぱつと出る。

第 二

「阿爺様、其様な事を云は無いで歸りませうよ、既う遅くもなりましたから。ねえ雪江さん。」と老人の袖を曳いて云ふのは薫である。「あゝ、其れに、叔母様の家は忙しいから、また他日來ることに爲ませうねえ。」と雪江と共に老人を謙す様に云つた。

一行は今しも廣く枳殻垣を廻した、粗末な開戸の柱に「栃木農談會高根澤支部」と記した長い札を掲げた家の前に通掛つて歩を停めたところである。

「先刻約束したから、鳥渡寄つれ行う。」

老人は他の止むるも肯かず其處の門内に杖を入れ様としてゐる。

「だつて、叔母様の家は養蠶で忙しいんだもの、邪魔になるから歸りませうよ、何も今日に限らないぢやありませんか、よ、阿爺様、」と云つてる間、腕車に乗つて居た少年は早くも犬と共に下りて門内に駆込んだので、薫は聲を張揚げて、「秀様、何處へ行くんですよ、此方へお出でなさいよ、秀様や。仕様が無いねえ、ぢや捨てゝ行きますよ。」

「捨てゝツても可いよ、僕は一人で歸らア……。」と少年は桑の樹の間を母家の方に駆けて行つた。

而ると、忽ち母家から一人の白い手拭を被つた、色の白い、丸顔の四十幾歳とも見える婦女が、襦を脱しながら此方へ駆けて來て、「おや、今お歸りですか。」と皆へ小腰を屈めて笑ひながら近寄り、「大變長かつたぢやありませんかね、さ、まお入りなさいよ、何して居らツしやるの？」

「は、有難う、」と雪江は點頭うなづいて、「叔母様、今日は遅くも成りましたから、是で失禮しますよ、何卒皆様へ宜しく！」
 「何ですや雪江様、先刻、歸りに寄ると云つたぢやありませんか、お入りなさいな、其様な事を云はないで。折角進げ様と思つて、拵らへてた物もあるし、さア。」

「だつて、叔母様も忙しいでせうし、」と薫を見て、「ねえ薫様。」
 「あゝ、また他日上りませうね、養蠶が済んでから。」

「何ですよ、貴女まで其様な事を云つて、可けません、寄らなきや歸しません、」と叔母は人々の背後に廻つて手を擴げて、「さ、皆なお入りなすつて下さいよ……、さ、雪江様、如何したんですよ、貴女が其様なにしてるから、皆な遠慮してるぢやありませんかね。」
 「でも、忙しい處へお邪魔だらうと思つて、」と雪江は詮方なしに二歩三歩歩を轉した。

「いゝえ、今は丁度暇な處ですよ……。何が何だつて、此處まで來て寄らないつて事があるもんですか、さ、竹代様、貴女まで遠慮してるの、如何したんですよ今日は？」

「わかいものは、うちいまツれるものがあるからゝ、はゝゝゝゝ。」老人は例の緒なく笑つた。

「若い女は、家に待つてゐる人が有るからですか？ ほゝゝゝゝ、然うでしたねえ阿爺様。」と叔母は元氣よく笑つて、「ですけれど、常雄様は未だ歸らないでせう……。幾ら疾く會ひ度いと云つても、家に居ない者なら仕様が無いぢやありませんかね、それとも、人情は然う云ふものか知ら？」

「叔母様つて云や、直き彼様な厭なことを……。と雪江は紅くなつて莞爾した。

「だつて、ねえ薫さん、ほゝゝゝゝ。」

「おほゝゝゝゝ。」と薫も竹代も笑出した。
 一同は門の内に入つて來た。十五六間の間は一圓に桑畑で、其處を通抜けると瓦葺かへきの大きな平家であるが、其の玄關から上らず、庭

へ廻ると、養蠶時で此處の掃除までは手が届かぬか、桑だの藁屑だの一杯に散ばつてゐる間を、數多の雛を伴れた牝鶏が餌を求り歩いてゐる。

「叔母様、過日蠶に鼠が付きましたつてねえ。」と薫は、近年建てたらしい養蠶小舎の檐下を通る時に云つた、「此處へ置いたのですか。」

「いゝえ、彼方の坐敷にね。」と叔母は母家の方を顔で示して、「七分二枚置いたのをね、只た一晚の内にまア、悉皆遭られて了つてね……。」

「おや、皆な鼠に遭られて？」と雪江も訊ねる。

「あゝ、最う大變にね。左様さね、三ヶ一も遭られましたらうよ。本當に大きな目に遭ひましたよ。」

「まア、可けない事を爲ましたねえ、」と云ひながら、雪江も他の人々と共に立止つて、小舎の中を覗き込んだ。

天氣が好いので戸は悉とく開放してある。小舎の内は二間に五間許を、二列に長く棚を設けて、天井へ達く程に積並べた籠は幾百枚であるか、蠶の桑を食む音は一種の響を成し、其のまた臭氣は暖かな風に蒸されて人々の鼻を衝くのである。

「おゝ、大變大きい成つたらア。」と老人は杖を力に内を覗込んで云つた。

「最う三眠でせう？」と薫は訊ねた。

「あゝ、明日ですよ。」

「ぢやア、此からが忙しいのですねえ、」と雪江は何故とも無く莞爾して、「叔母様、皆なで手傳に上りませうか？」

「あゝ、何卒ねえ、」と叔母も笑顔を示せて、「常雄様と一緒に來て下さいな。」

「また彼様な……。と雪江は嬉し様な色を無理に厭な様に見せる。
 「ほゝゝゝゝ。」と薫がまた笑つた。

さて此の養蠶小舎の前を過ぎると、處々に梅を植ゑた茶畑で、茶

畑を通抜けると爰に廣き邸内を一目に見渡す様に建てられた二階作の離坐敷がある。一同は此處へ案内された。成程歸を待受けて居たらしく、室の内を片付け、坐蒲團、茶、煙草盆など並べて、椽頭にはラムネが水に漬つてゐる。

「二階だと宜かつたけれど、餘り取散してあるし、それに、阿爺様が何だからと思つてね、」と叔母は一同を室の内に請じ入れ、「おや、お民は何處へ行つてゐるだらうね？ お民や、お民……」

椽頭に立出て呼ぶと、屋後の彼方から答へる聲がして、十四五のほつそりとした、顔色の黄色い小娘が駈けて來て、「同へ笑ひながら挨拶をした。

「お民様、暫く會ひませんかツたねえ、」と竹代が懐しみに云ふと、お民も懐しみに其の傍に寄つて、

「はア、暫く。此の頃は亂が忙しいもんだから、上り度いけれど上れないんですもの。でも、毎日一回はね、復讀しますの……」

「お民、何ですよ、其の言葉が、先生へ對つて無作法な。」と母は叱つて、「いゝえ、竹代様然うぢやありませんよ、勉強する氣ならね、幾らも勉強する時間がありますけれどね、少し暇があると、只だ最う遊んで許り居るのですよ。」

「あら、阿母様嘘ばツかり。」

「本當の事ですよ、だつて、今も其の通り遊んでたぢやないかね。」
「いゝえ、遊んで居しなくツてよ。秀様が、櫻實を採つてお呉れツて云ふから、それで採つて居たのよ……」

此う云つてゐる處へ、例の水兵服の少年が、口の端を眞赤に染めて駈けて來た。

「おや、如何したの秀様……？」 薫は少年の顔を見て吃驚したが、

「おほ……」
老人も、雪江も、竹代も、叔母も皆などツと笑出した。少年はきよろく人と人々の顔を見廻して、

「何だい、皆なして笑やがツて、何だい。」と泣出し想な顔をした。

「だつて、お前様が其様な顔してゐるぢやないかね。洗つてお出でなさいよ、見とも無い。」と薫が云ふと、

少年は最う涙を見せて、

「可いぢや無いのか、何様な顔してたツて可いぢやないか、櫻實食や、誰だツて……叔母様だツて、唇へ着くぢやないか、何だい、人を笑やがツて、何だい、失敬な……」と泣吃逆しながら云ふ。

「まア、秀様、其様な事を云はないで堪忍してお上げなさいよ、而して、此方へお入らないさいよ、ね、笑つたのは悪いのだから、ね、可いでせう、笑つたのは叔母様許ちや無いもの、皆な笑つたもの、私も笑ひましたもの、堪忍して頂戴よ、ね、可いでせう、」と雪江は少年を宥めて、紐上げの靴を解いて遣りながら云つた。

少年は雪江の爲すまゝに導かれて、老人と雪江との間の坐に就いたが、猶泣吃逆しながら薫に惡口して居る。

「何だい、人の事を笑やがツて、叔母様だツて、叔母様だツて、小兒の時は櫻實を食つたらう、其時は、矢張り、口へ着いたぢやないか、何だい人の事ばかり……」

「あゝ煩い、」と薫は笑ひながら顔を顰めて、「叔母様は小兒の時から、其様な下等な物なんか食た事は無いよ。」

「嘘を云へ、嘘を云へ、誰だツて小兒の時は食ふ物なんだ、叔母様は、生れた時から直ぐ大人なんか、嘘を吐け、食つた事が無いなんて……」

「あゝ、私は生れた時から大人さ、秀様の様な其様な小兒ぢや無かつたよ。」

「小兒で無きや、ぢやア、叔母様は大人で生れたのか、其様な道理が有るもんか、人間は皆な、人間は皆な……」

「まア秀様、可ぢやありませんかね、堪忍してお遣りなさいよ、」と雪江は宥めて、更に薫に胸を叩いて、「貴女もまた黙つて居らツしやいよ、其様な餘計な事を仰有らないで……。ねえ秀様、小兒に調戲つたりなんかして、本當に悪い叔母様ですねえ。ま、今日は堪忍